

---

~ L i f e ~

大和みさき

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

Life

### 【Nコード】

N1434B

### 【作者名】

大和みさき

### 【あらすじ】

（ 作者は執筆速度が遅いので滞る事がしばしばあります）世界は『大戦』という戦争を経験し、人類は二度と同じ過ちを繰り返さないために『人類統制計画』を実行に移す。人類は、平和と引き換えに“個”を失った。その“個”を取り戻すべく発足された『フリーダム・レヴオリューション』テロまがいな事を始めたこの組織に對抗すべく『ガーディアン』が発足される。これは、ガーディアンの『ルオン・スターティッド』という青年が主人公として進められていく話である。そしてこの『序文』では、話を進めていく過程で、

~ L i f e ~

常識として知っておかなくてはならない世界観が書かれているので読んでおくと、このお話が、読んでて分かりやすくなると思われる。

序文：この世界とは…（前書き）

この作品は、武竜さんからストーリーを頂いたものです。

前に執筆したことから随分と時間が空いてしまいました。…とい  
うのも、私の仕事の都合で、最近は忙しかったんです。今は追い込  
みの時期に突入しかけてまして、もしかしたら来年の二月くらいま  
では執筆出来ないかもしれません。

でも打ち切り、なんて事は絶対に致しませんので、気長に楽しん  
でもらえれば、と思います。

## 序文：この世界とは…

かつて、この星全土を巻き込んで起こった、大規模な戦争があった。

後に人々は、この『大いなる戦争』を『大戦』と呼ぶようになる。この大戦により、あらゆる植物が炎に包まれ、様々な動物が逃げ場を無くし、絶滅の一途を辿った。

人間も例外ではなく、世界の総人口数は半分以下になり、非戦闘員の中には戦争反対のデモを起こす輩も出てきたという。

……当然だ。生きとし生けるもの全てが死んでいき、生態系は目茶苦茶になり、大地は所々表情を変え、建築物は次々と崩壊していき、環境汚染も徐々に深刻化しつつある中、自然の理をも破ろうとしていたのである。怒りを覚える者が居ても不思議ではない。

そんな世界滅亡への悪循環の中、大戦は終盤を迎え、多大な被害を出しながら終結した……。

人類は、二度と同じ過ちを繰り返さないために、ある計画を実行に移した。

計画の名は『人類統制計画』。とある一人の学者の大戦前の論文を元に考案されたものだった。

計画の内容は、全人類を一台の超大型AIによって管理するといふもので、このAIは、人々の感情を管理・調整し、人間が本来持つ闘争心を抑え、人類が二度と戦争を起こさないようにするというものであった。

確かに、計画が実行されて二十年が過ぎても争いごととは起きていないし、自然環境も人口数も少しずつではあるが、回復の兆しを見せていた。

~ L i f e ~

大戦が終結してから三十年後、人類の文明は大戦前のものと同レベルのところまで発達していた。

この時、人類の総人口も爆発的に増加し、大戦前と変わらないくらいに人数が増え、超大型AIだけでは細やかな統制は厳しくなり、各地域に小型・中型・大型のAIを、地域の人口に応じて設置し、引き続きAIでの統制を行った。

しかし、大戦前と確実に違うのは、争いのない世界の代償として全人類に“個”が無くなった事だ。

……いや、全人類ではない。例外が現れたのだ。

彼らは何故かAIによる統制を受け付けず、“個”を持ってこの世に生まれてくるのだ。

そして今ある人類の、社会の過ちを指摘し、即刻AIによる統制を止めるべきだと主張し始めた。

しかし、その主張は受け入れられず、AIは自分の管理によって統制できないと判断すると、彼らのことを『異端者』と名づけ、『異端者狩り』という名目で、この世界に害をなすとして、AIの管理から外れた者たちの虐殺を行わせた。

しかし、何とか狩りから逃れた異端者達は地下へと身を隠し、一つの組織をつくる。

組織の名は『フリーダム・レヴオリューション』通称、FRと名付けられたこの組織は、AIに管理されない、全人類が“個”を持つ世界を取り戻すために、AIを次々に破壊するというテロまがいなことを行い始めたのである。

そんな時代の中で、一人の若者が現れる。

彼の名は、ルオン・スターティッド。AIを守るべく組織された武装集団『ガーディアン』の一員である。

そんな彼が、後に大きな障害に出会う事になる。その時彼は、どうしてゆくのだろうか……？

序文：この世界とは…（後書き）

いかがだったでしょう？

私自身がこうゆう事をするのが初めてだったので不安なんです、  
ご不満な点がございましたら遠慮なくどうぞ。

武竜さんから頂いた設定を、上手く文中に取り入れられるか分  
からなかったので、手っ取り早く世界観をまとめちゃいました。  
がっかりされたらすみません。

……えっと、とりあえずこの辺で。

## 第一話：ルオン（前書き）

手違いで『何処までも』の小説が入っていました。スイマセンでした（汗） 前に書いたモノと若干違いますが、ストーリー進行に問題はありませぬ。

~Life~

## 第一話：ルオン

「霧雨が降っていた。

大戦前は栄えていたこの都市も、今では静寂が鉄板の様に薄く広がる廃都となつてしまった。

「...だが、今日はきぬ擦れの音がする。

「はあ...そろそろ帰らないと」

この子はフリーダム・レヴォリユーション、通称FRのエリエ。金色の髪が目立つ16、7歳の少女。

エリエは帰る為に小走りに走り出すが、足音は余りしない。

ドサッ...

「!?!?!」

廃ビルの崩れた壁の向こうから何か倒れる音がして、咄嗟に身を潜めるエリエ。

そつと壁の向こうを窺つと、

「!?!?!?!」

自分より少し年上に見える青年が倒れているを見つけ、予想もなかった光景に、エリエは困惑を隠しきれずにいた...

~Life~

「"アイツ"が来たつてのは本当か?!」

部屋のドアを開けたのとほぼ同時に口を開いたのはFRのこの辺一帯のリーダーをしているルクフ・ガルグ。

そして、ガルグに話し掛けられたのはFRで医療系を担当してい

るユイ・カンザキ。

「正確には、エリエが倒れてた青髪の青年を拾ってきたんだけどね。」

「捨て猫じゃあるまいし、ましてや行き倒れてるガーディアンのおんなか拾ってくるなよなあ」

ため息混じりにガルグがぼやく。

「まだ”アイツ”だって決まってるじゃないでしょ？ それにエリエはジャックを亡くしたばかりなのよ？ 同じ背格好の男の子を放っておけなかったんでしょ」

「まあ、しょうがないってのは判る。だが俺達は『過去』よりも『未来』を優先すべきだろ？」

「そんなの、誰だって言われなくても判ってるわよ…」

一瞬の沈黙。

なんとも言えない微妙な空気が二人の間に流れる。

そして、この沈黙を破つたのは控えめなノック音だった。

「あの、ユイ先生。あの人はどうですか??」

物音を立てないように気を付けて入ってきたエリエ。

先刻までガルグとユイを包んでいた空気は既になかった。

「命に関わるような致命傷は負ってないわね。けど軽傷って訳でもないって所かしら」

エリエに向かって、おおざっぱに説明をする。

と、その時。

「…? …? …? こ、こは??」

青髪の青年が目を覚ました。

天井のライトが眩しいらしく、まだ薄目がちな青年に、ガルグが説明をする。

「はじめまして、俺はルクフ・ガルグ。この辺一帯のFRのリーダー格やってる者だ。んでここはFRの本部にある医療室だ。」

「あ、それからキミ、全身麻酔してあるからむやみに抵抗しない方が身の為よ。下手に動くとも傷口も開くからね」

サバサバした、というかほぼ脅迫に近い形で青年に言い放つユイ。

「ユイ、いくらなんでも初っ端しよっぱなからソレはないだろ」

やれやれといった感じでツッコミを入れるガルグ。

「で、早速なんだけど、君の名前聞かせてくれる？」

気を取り直して本題に入るガルグ。にこやかに笑ってはいるが、気を張り詰めているのが若干だが判る。

そんなガルグを見て、ドアの横に居たエリエは無自覚に息を呑んでいた。

青年は、麻酔のせいでまだ呂律が回らないのか、たどたどしく喋る。

「…ル、オン・スターティツド。ガー、ディア、ン所属…っ……」

「?!?!?!?!?!」

「?!?!?!?!?!」

ガルグとユイがルオンを凝視する。

二人がどう行動を取ろうか思案している時 - -

「やあああああああ!!!!!!」

突如としてエリエがルオンに飛び掛かっていた。

## 第二話：エリエ

ルオンの心臓目掛けてナイフが大きく振り下ろされる。それを反射的に阻止しようと手を伸ばすガルグ。

「――！ 放してっ！」

ガルグは、ナイフがルオンの心臓に届くより数瞬速くエリエの手を掴んでいた。

「……もう止すんだ。エリエ」

怒りから平静さを失っている様に見えるエリエ。

「気持ち解る！ だがここは我慢してくれっ！！！」

続けて言う。その瞳には、優しいけれども悲しい光が灯っていた。「意味分かんない！ 我慢なら今までいっばいしてきたよ！？ 敵討ちくらいさせてよ！！！」

パアン

ガルグとエリエの口論の中、何気なくユイが二人の方へ歩いて行き、エリエの頬を叩く。

叩かれたエリエは勿論の事、ガルグまでもがびっくりしていた。

「いい加減にしなさい、エリエ。貴女がそんな事してもジャックは喜ばないに決まってるでしょ」

ユイはエリエを見据えて言った。

その長い黒髪の奥に存在する黄金の瞳は、威圧感を醸し出していた。

医療室の中が静まり返る。

放心状態のエリエ。ユイはガルグに目配せをする。

ガルグは頷き、エリエからナイフを取り上げて、医療室から出るように促してエリエとともに退室する。

ドアが閉まり、静寂が戻ってくる。

「さつき、何か言いかけてたわね？ 何て言おうとしてたの？」  
エリエの奇襲攻撃の事は忘れたかの様に平然と流して喋るユイ。  
「ガーディアン、所属 だった。今、はガーディアンに…追われて  
る」

麻酔が抜けてきたのか段々と言葉が繋がるようになる。

「どうゆう事??」

眉根を寄せるユイ。その顔には疑いよりも驚きの方が多かった。

「理由は、異端者と認定、されたから」

「じゃあ、その時の事を詳しく聞こうかしら」

ユイが事情聴取の様に淡々と話しをリードしていく。

だが、その内心の思考は立体高速道を車が行き来する様な、あち  
こちを飛び回る盛大な戸惑いでいっぱいだった。

第二話：エリエ（後書き）

第一話の方に手違いで私の書いた前作が入っていた事で混乱された方も居るかと思います。ご迷惑おかけしましたm(\_\_\_\_\_)m 新たに書きましたので多分大丈夫だと思います。……マイペースにやっています、暖かく見守って下さると有り難いです

### 第三話・始まりの日

俺がどのくらい眠っていたか、分からないから、とりあえず数日前。

異端による、大型AI襲撃があった事は、言うまでもない。事の起こりは、その後だった・・・

異端者達が引き上げた後、半壊とまではいかないが、それなりに傷が付いているAIを見上げていた時だった。

『……………いよ……………』

突然、女性の声らしきモノが聞こえた。それも意思のある声。ガーディアンの中には想いを伝えようなんて奴はいない。だから異端の生き残りだと思った。

でも、何処で声がしてるか、何を言っているのか判らなかった。耳の奥で聞こえるような・・・そう、頭の中で響くような声に気分が悪くなりそうになる。

「引き上げだ。早く撤収準備に掛かれ」  
感度の良い小型無線機からは指揮官からの撤退命令。

（相変わらずマニュアル通りだな。）

ふ、と頭に浮かんだ思考。…有り得ない。ガーディアンである自

分がこんな事を想うなんて。

困惑している自分に気付き、更に驚愕する自分が居る。

己の事が理解出来ずにいて、思わず脱力して傍にあったAIに手を付いたその時――

『――目覚めなさい、救世主よ!』

今度はハッキリと聞こえた声。瞬間、ナイフで貫かれた様な激しい頭痛に襲われる。痛みで朦朧とする意識の中、聞こえたのは非常警報の音と『“個”を、取り戻して……』という言葉だった。

「異端の侵入が確認された。現在位置、AI周辺。各員、緊急戦闘体制に移行。速やかに行動せよ」

無線から指揮官の声が流れてくる。

今自分が一番近い位置に居ると思いき、消えかける意識に鞭打って辺りを見回す。が、人影は見つからず不思議に思っている時に、無線から新たな情報が流れてきた。

「異端者は名をルオン・スターティッド。ガーディアン所属。コイツは例外だ、生け捕りにしろ」

「!!!!?」

まだ痛む頭では何も理解出来ず、更に混乱するばかりだった。

そんな時、遠くから自分目掛けて発砲があり、数発が肢体を掠る。

(ああ……本当に自分を狙ってるんだな)

と思う。焦燥感というか、身体が逃げ出したいと言っているようだった。

コレが“恐怖”なんだと、初めて解った。

気付いた時、身体は動き出していた。

何処へ向かって、どう逃げてきたのか分からなくなってきた頃、既に体力の限界を越えていた俺は、気力だけでガーディアンを振り切り、廃都へ辿り着いた。

警備の薄そうな所に身を隠そうと手近な場所を探し歩き、そのうち緊張の糸が切れたのか、何分もしないうちに意識が途切れた…。

そして、気が付いた時には異端の本部に居た - -

**第三話・始まりの日（後書き）**

第二話で、ユイがルオンに事の発端を聞いて終わったので、第三話ではルオンの一人称でまとめさせてもらいました。まだ麻酔が少し残っているルオンでしたので、最初の方は読点を多めにしてみました。ですが、如何だったでしょうか？

## 第四話：“声”

「で、倒れた所をエリエが拾ってきたのね」

確認するユイにルオンがおそらく、と付け足しながら頷く。

一呼吸置いてからユイが喋る。

「とりあえずキミは感情を持ったのね。……良いわ、FRはキミを保護します。でも不審な行動を取った時は、容赦しないからね」

にこやかに笑った。だがその笑みにはどこか黒く、渦々しいモノがあり、無言の脅迫をしている様だった。

次の言葉を発する時には医師の顔に戻っていた。

「それにしても驚いたわ。貴方もう麻酔切れてるんじゃない？」

自由奔放に言う事だけ言っていくユイ。返事がどうあっても変わらず話を続けていきそうな勢いだ。

「まだ若干残ってますが、普段と変わらないくらいには動けます」  
ルオンは仰向けの体勢を起こしながら言う。

問われた事にだけ答えていくルオンは、何を言われても無関心でいる雰囲気だ。

「とりあえず、ルクフ・ガルグ でしたっけ？ 入って来て下さいよ」

唐突に言い出すルオン。と、ドアが開き、ガルグが入ってくる。盗み聞きしていた様だ。

「話しは聞かせて貰った。感情を持ったなら、俺達は君の味方だ。

だが、皆が君を仲間だと思つかどうかは別の話だ」

真剣な顔で話すガルグ。

「ココに居た方が何をするにも都合が良いので、取り敢えず頑張ってみます」

言ってから少し驚いた様だった。昨日までのルオンでは言えない台詞。“取り敢えず頑張ってみる”なんて曖昧な言葉、今まで使った事もないルオン。

「しっかし驚いたぜ。ガーディアンでも1、2を争う強さの君がガーディアンを裏切るなんてねえ 一体何したんだ？」  
興味深げに聞いてくる。

「よく判りません。声が聞こえて、急に頭痛がしたら、警報が鳴って、自分が異端だと…」

冷静に説明をしていく。そこでガルグが口を挟む。

「ちょっと待て。今の話だと、その声の原因で頭痛がしたと解釈出来なくもないんだが？」

「そうかもしれません。“聞こえた”と言っても空気の振動による聴覚的音というよりは、脳に直接働き掛けられているような、変な感じでした」

あの時の事を思い出しながら喋る。 - - と、その時だった。

「?!?! … 貴女は何なんだ？ 一体何処から話してるんだ?!」

ルオンが唐突に言った。その声にガルグが困惑の声を挙げる。

「ルオン・スターティッド 君は、一体誰と話してるんだい？」

「!!! 貴方達には聞こえなかつたんですか？ マリアと名乗るA Iの声が…」

「?!?!?!」

驚くガルグとユイ、唾然とするルオン。

ソコには戸惑いの沈黙が流れていた - -

第四話：“声”（後書き）

始めは1話千文字強で収めていましたが、段々と1話二千文字強になつてきている今日この頃… 千文字つて短いですね（苦笑）自分の力不足を思い知ります； のろのろしてますが、叱咤激励して頂けると励みになります。

~ L i f e ~

第五話：声の正体（前書き）

暫くお待ちせして申し訳ありませんでしたm（  
） m

## 第五話：声の正体

『私は独立型A Iマリア。貴方の“個”を解放しました。 全人類の“個”を取り戻して…』

「……もしかして俺だけに聞こえてるのか？」

ルオンはそうゆう考えに辿り着いた。

「空耳じゃないのね？」

疑い半分で聞く。その後、自信を持って答えるルオン。

「はい。ハッキリと女性の声で独立型A Iマリアだと言っている。それから」

言っのを一瞬躊躇う様に見えた間の後、その続きを口にした。

「俺の“個”を解放したとか、全人類の“個”を取り戻せだとか言ってる」

「ま、どうするかは自分の意志で決めるんだな。」

一呼吸置いてから話すガルグ。

一見、突き放した様な物の言い方。だがそれは、FRの理念である『誰もが自由な思考をし、生きていく』という事が根底にあつての言動だった。

「……………」  
無言のルオン。地面のある一点を見つめ、戸惑った表情をしている。

「ま、すぐに答えを出さなくても良いさ。取り敢えず君の部屋の準備をしてくる。それまで色々と見て回ると良い」

見兼ねて、そう促す。

案内を付けないのは、まだルオンを完全に信じた訳では無いから

で、スパイである可能性を切り捨てていないからだ。

初めて来た者が簡単に地下シェルターの心臓部や、本部の重要機関へ行ける様な構造にはなっていない為、ルオンが一人でふらふらする分には重要機関への侵入が少しは抑えられるかもしれない。それにガルグやユイの居る医療室は居住エリアが近い為、此処での暮らしぶりを見せてあげたかったからだ。

FRの本部は地下にある。もともとは、大戦時に造られた避難用シェルターで各地域に複数存在しており、その時々で絶えず増改築をしていた為、今では全容の把握は誰にも出来ていない。

用途や人口によって様々な様式の構造になっていて、場所によっても雰囲気の違い、重要度によって、第一層・第二層・第三層に振り分けられている。

1 番地上に近く、主に一般人を収容したのが“第一層”

2 番目に近く、国の重鎮等が安全で快適に暮らせるようにしたのが“第二層”

1 番地下深い所に位置して、シェルター内の電源となる発電装置や、科学技術を駆使した食糧生産ライン、そのシェルター全域のほぼ全てを管理しているシステム有るのが“第三層”

総面積が1番広く、最も増改築されているのが第一層であり、様式に種類があるのも此処だ。

ルオンが今居るのは第一層である。この辺りは農村の様な感じで地面には土があり、天井には太陽を摸した科学ライトが光っている。

人々は地上に居た頃と何等変わりない様に田畠を耕して暮らしている。

長閑な時間の流れる場所。例え最初は偽証の安寧だったとしても、今では日常と化して真実となっていて - - 人工の太陽でさえも暖かく感じられる。

(? 地上の太陽はここまで暖かいものだったか?)

ふ、と感じた事。ガーディアンであったルオンには感じる事も無かった事。

普段よりも落ち着いていて、身体がリラックスしている。

「コレが、安らぎ…か？」

今まで感じた事の無い気持ちを一身に受けている。こんなにも心地良いモノだったのか と言わんばかりである。

暫くうろつろしている、目に入った家を覗いてみたくなったルオン。

第六感というもののなのか、好奇心というものののかは、よく分かっているが、取り敢えず入ってみようと歩を進めた。

家の中に人気は無く、住んでいるのかも疑問に感じられる場所。決して荒れている訳でも、埃っぽい訳でも無かったが、外とは別空間にあるとさえ錯覚してしまう場所。

何も考えずに見入っていると、背後から誰かが入ってくる音がして、思わず振り返りながら一歩引く。

第五話：声の正体（後書き）

なんか夏はプチスランプみたいなものでして：今でも少し抜け出せてないんですが、二ヶ月以上もほったらかす理由にはならないので、ちまちま執筆したり数週間封印したりして、やっと書き上げました；  
； 本当にすみませんでした（――）

~ L i f e ~

第六話・憎しみの理由（わけ）（前書き）

今回は短くなってしまいました。楽しみにしてた方（まずいな  
いと思いますが）色々とすみません（――）m

## 第六話：憎しみの理由（わけ）

背後から人が入ってくる気配がして、思わず振り返りながら一歩引くルオン。これはガーディアン時代に培った反射的な行動だった。

「！ アンタ ここから出てってよ！！」

憎しみたっぷりに言い放ったその人物は、猫が敵を威嚇する様な毛が逆立つ様な雰囲気できり立つエリエだった。

「……………」

対するルオンは無言のまま何もせず、ただ眺めているだけ。

対峙する二人は正に『静』と『動』

を表している様で、対照的という言葉がピッタリだった。

黙っているのを見て、更に頭へ血が上ったエリエはポケットから小型ナイフを取り出し、ルオンに飛び掛かる。

「やああああああ！！」

が、エリエの技量では当たる訳も無く、ナイフは虚しく空を切る。避けたルオンを睨みつけるが、無表情のまま、反撃しようともしない。

「貴女に俺は殺せない」

放たれた言葉は事実でありエリエ自身も解っている事。だからこそ自分を奮い立たせるべく口調を荒くする。

「五月蠅いッ！ アンタは兄さんの仇！ 生かしてなんておけない

！！」

「……………」

それでも無言なルオン。

「この小型ナイフに見覚えはあるわけないよねッどーせ殺した奴の事なんか一々覚えてないでしょーよ」

手に持っているナイフを前に突き出しながら言う。

ルオンは 覚えがないという様に首を傾げる。

そんなルオンを見てエリエは、

「アタシの兄さん…ジャックは、この前のA I襲撃の時アンタを引き付けておく筈になってアンタに殺されたのよ！」

目につつすらと涙を溜めて語り出す。ジャックの事を思い出したのが段々としんみりしてくる。

第六話：憎しみの理由（わけ）（後書き）

長い間滞ってすみませんでしたm（・|・）m 意外とスランプから抜け出せなくて勝手ながら執筆を止めてました。今でも完全に抜け出せた訳ではありませんが、チビチビ執筆していきます。

~ L i f e ~

第七話：果てしなく続く物語（前書き）

長い間放置してすみませんでしたm（―――）m リアルとの折り  
合いも考え、無理やりながら最終話とさせていただきました

## 第七話：果てしなく続く物語

時を遡る事半月。AI襲撃の作戦会議中の事である。

「これから大型AI襲撃作戦会議をする。まず始めに今回の作戦は付近のFRメンバーとの合同で行う。」

ガルグが話を切り出す。此処にはFRの各部署の責任者が集まり、会議が行われていた。

「今回の作戦はいつもより厳しいものになると思う。向こうも相当な戦力を集めてくるだろう。当然、“アイツ”が出張る事も考えておくべきだろう」

ガルグが議題の矛先を決める。

“アイツ”とはルオンの事であり、何度となくルオンに作戦を阻まれてきたのである。

「やはり誰かが囷になって」

「いや、“アイツ”に匹敵する者も少ない。第一……」

「大人数が纏まって突っ込めば」

「それでは無駄死にはないか！ここは……」

それぞれ思い思いの方向に話が飛ぶ。些か収集が着かなくなってきた、そんな時――

「ぼくが ぼくが “アイツ” を引き付けます」

皆は一斉に声の方を見る。その声は小さいモノだったが、誰の声にも掻き消されず、強くハッキリと全員の耳に届いた。

「……ジャック、分かっているのか？」

ガルグが静かに問う。突如、物音1つしなくなる。

「分かっています！ ぼく1人では無理かもしれないけど、狙撃部隊の人に手伝って貰って、AIから遠ざける時間稼ぎくらいなら！」  
ジャックは実動部隊長の代理として今此処に居る。

頭が切れ、実力も上がってきた若手に、これから死に行け、と

いう事と意味を同じくする様な事を言うのは気が引けるガルグであったが、それは言っている本人のジャックも分かっている事だ。それに困としてジャックは適当な人材であるのも確かなのであった。「俺もお前が適任だと思う。だがな、エリエはどうする？」

「しつかりとジャックの目を見る。それを真っ直ぐに見返し、

「まだ死ぬつもりも、負ける予定もありません。大丈夫、エリエを1人になんてしません」

淡く微笑む。真の強い言葉に真剣な眼差し。

ガルグはその申し出を断る理由が無くなってしまった事に、ジャックの成長を感じながら答えを出す。

「……分かった、良いだろう。その方向で作戦を立てよう」

「……ハイッ！」

「皆っこれから忙しくなるぞ！ 気合い入れてけ！！」

今回の会議は作戦の方向性までを決めるものなので、ガルグが終わりに向けて話を纏める。

「作戦の細かな説明は後日通達する。各々分かっていると思うが準備を進めておいてくれ！」

「……ハイッ」「」

ガルグの指示にその場の全員が答える。もちろんジャックも。

この時、これから起こる事態を予想出来た者はいただろうか？

この先に待っている苦難の後に在るものは果たして希望の光なのか？

既に動き出した運命と、それぞれの思惑の中で彼等は一体どうなっていくのか？

**第七話：果てしなく続く物語（後書き）**

こんな形で終わらせるのは本望ではないのですが、時間と意欲の問題などあり、このままグダグダ続けるのは良くないと思い、終わらせることにしました。続きが読みたいとゆう方が居ましたら、私のブログの方で不定期に短くアップする事も考えているので、ご一報下さい。色々とお教えします。

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

### PDF小説ネット発足にあたって

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1434b/>

---